昭和63年度厚生省心身障害研究
「母子保健システムの充実・改善に関する研究」

母子歯科保健管理に関する研究

井上　直彦 *　　伊藤　学而 **　　井上　昌一 ***
亀谷　哲也 ****　　桑原未代子 *****　　幸地　省子 ******
塩野　幸一 *******　　坂下　玲子 ********

要約：乳幼児歯科保健の真の目的は咀嚼器官の健全な発育に向かって、母と子との、それぞれの動機を誘発し、その持続を図り、このための能力を開発することにある。このようなことを目的として、本研究班では、沖縄県宮古地方に設定した２つのモデル地区において、昭和59年度より５年間にわたる総合的歯科保健計画の試行を続けてきている。研究プロジェクトの最終年度にあたって、ここでは、齲蝕、歯周疾患、食生活などに関連して９つの主題について報告する。

見出し語：発達期、歯科保健、齲蝕、歯周疾患、食生活指導

研究方法：健康教育と食生活指導を基幹とするモデル地区での試行に関しては、今回はじめて、齲蝕を取り上げた。すでに多くの機会に述べた通り、歯肉炎はその時どきの食生活を敏感に反映する。しかし、齲蝕では、反応が遅いこと、病変が不可逆的であること、従って治療結果が蓄積されて残ることなどのために、ある単位時間内に起った変化を正確に把握することは難しい。このような理由で齲蝕の場合には、中期的な成果として評価するのが妥当である。モデル地区活動の開始から未だ５年であるので、その検討はようやく緒についたばかりであり、本格的な解析は今後の問題ということになる。今回は、井上（昌）による齲蝕罹患状況の推移と、塩野による治療的な対応とが報告されている。歯肉炎に関しては、食生活を変える運動の強化週間をおくことを止めた段階での資料によって、坂下および幸地が、それぞれ異なる見地からの解析を行っている。亀谷による論文は、モデル地区における実態を、異なる食文化をもつ異民族であるトンガ王国の子ども達と比較したユニークなものである。この10年間の研究経過を通じて常に感じてきたことの１つは、食生活に関する調査が非常につかまえどころがなくて難しいということであるが、モデル地区活動を通じて、ようやく２、３の具体的な手がかりが得ら

*東大分院歯科口腔外科　**鹿大歯科矯正　***鹿大予防歯科　****岩医大歯科矯正
*****藤田学園大歯科口腔外科　******東北大口腔外科　*******鹿大小児歯科　********東大母子保健

れてきたように思われる。その１つは、坂下が症例を挙げて示した授乳期から固形食への移行期にかけての食生活の問題である。また伊藤は、液体食による咀嚼器官の発達の低下の測定を唾液腺にまで拡張した結果について報告している。最後の２編の論文は、桑原によるもので、やや年長の世代における若年歯周病と若年糖尿病における歯科疾患の実態に関するものである。

結果：個々の論文において得られた知見については次項以下に詳しく述べられているが、ここでは結論的な部分についてのみ転記する。まず、齲蝕の年齢推移に関しては、モデル地区活動開始時から継続している子どもと、その後に生まれた子どもとでは、推移の様子が異なるらしいこと、また、年長児になるにしたがって、齲蝕増加傾向が低下するものと、変化がないものとに分極化するという、歯肉炎と共通の現象が認められている。齲蝕の治療については、マンパワーに問題がある無歯科医地区での治療システムがほぼ定着したように思われる。歯周疾患に関しては、年齢の進行とともに重症度が低いものと高いものへと分極化すること、食生活が良い状態にあるときには歯周疾患も確実に改善されていること、しかし、食生活指導の効果を持続させることがきわめて困難であることが指摘されている。トンガ王国との比較では、食生活の違いが歯科疾患に対してどれほど大きい影響をもたらすかがはっきりと示されている。そして、モデル地区活動の目指す方向が正しいものであることを裏付けているように思われる。坂下による固形食形態への移行の症例は、現代の離乳理論に背くものの中に顎発育のよい子どもがいることを示すもので、直ちに結論に結びつけるものではないが、きわめて重大な示唆を与えるものと考えられる。伊藤の実験的研究では、唾液腺という新しい標的を捉えて、液体食を飼料とすることによってその発達の低下が起こることを証明している。最後の２題は、モデル地区とは別の臨床的な研究であるが、ここでも、成人病の低年齢化との関連のもとに口腔内に生じた新しい問題を提起し、正しい食生活の重要性を指摘している。

考察：本研究はきわめて順調に進行し、いくつかの具体的な成果が得られたと考えられる。しかし、現在進行中の主題も多く、一層の努力が必要と思われる。とくにモデル地区の齲蝕に関する検討は、ようやく可能な時期に到達したばかりであり、今後の解析の進行が期待される。一方、発達期における歯肉炎の動態と、これに対する食生活の関与については多くのことが知られ、今後、全国規模での食生活指導の体制の一層の整備が必要と考えられる。すなわち、本研究によって得られた情報を分かり易く整理し、独立したパンフレットの形で、あるいは、従来の栄養指導のための冊子に組み入れるなどして、母子保健領域、学校保健などの場での活用を促進することが望まれる。これと関連して、現在、最も急を要する研究課題は、乳幼児期における食生活指導の見直しと、このための基礎資料の収集であることは、固形食移行期の食生活と液状食摂取に関する２つの報告の結果からも明かである。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:乳幼児歯科保健の真の目的は咀嚼器官の健全な発育に向かって、母と子との、それぞれの動機を誘発し、その持続を図り、このための能力を開発することにある。このようなことを目的として、本研究班では、沖縄県宮古地方に設定した2つのモデル地区において、昭和59年産より5年間にわたる総合的歯科保健計画の試行を続けてきている。研究プロジェクトの最終年度にあたって、ここでは、齲蝕、歯周疾患、食生活などに関連して9つの主題について報告する。